

埼玉県入間市金子地区の旧道沿いにおけるお茶の 景観分析に基づく狭山茶散策ルートの提案

張 平星^{*†}・山本美知留^{**}

(令和3年5月20日受付/令和3年10月22日受理)

要約：本研究は、日本三大銘茶の一つとされる狭山茶の主産地となる埼玉県入間市金子地区において、加治丘陵、霞川、金子台の地形構造と集落構造を反映した旧道沿いのお茶の景観を把握することで、狭山茶の景観上の魅力を発信できる散策ルートの提案を目的とした。選出した5ルートおよび入間市が整備した「茶畑と丘陵を歩く」コースを対象に、お茶の景観が見える区間と景観の変化点を記録し、QGISとAutoCADを用いて平面図と断面図を作成した。分析の結果、金子神社―西三ツ木橋ルート、愛宕神社―欄干橋ルート、山祇神社―大橋ルートの3ルートは、お茶の景観が見える区間が長く、景観の変化が多様であり、狭山茶の景観上の魅力発信に適していると考えられる。また、地形の起伏とアクセスを考慮し、3ルートそれぞれは金子駅からの利用者向け、仏子駅から加治丘陵の東部分を巡る登山者向け、高齢者向けとして提案できる。なお、「茶畑と丘陵を歩く」コースと併用することにより、お茶の景観に特化した短縮ルートが考えられる。

キーワード：狭山茶、お茶の景観、金子台、旧道、散策ルート

1. はじめに

埼玉県産の狭山茶は、静岡茶・宇治茶と並んで日本三大銘茶の一つとされる。全国の主要な茶産地の中で、北部に位置する狭山茶の主産地となる埼玉県入間市、狭山市、所沢市は、温暖な気候を好む茶樹にとっては寒冷地¹⁾であるが、年間1,300 mm前後の降水量は茶栽培に適している²⁾。また、砂礫層の上に火山灰層（関東ローム層）が分布する武蔵野台地³⁾は水はけが良く、水田には適さないものの茶樹の生育には適している²⁾。狭山茶は冬を越した茶葉が自然と厚くなり⁴⁾、コクと深い味わいを持っており、狭山茶摘み唄では「色は静岡、香りは宇治よ、味は狭山でトドメさす」と歌われている¹⁾。

(1) 狭山茶の歴史と現状

平安時代前期（9世紀）、唐から帰国した最澄や永忠、空海や円仁が寺院で茶の栽培を始めた⁵⁾。鎌倉時代前期（12世紀後半）に入ると、宋から伝わった点茶法（現在の抹茶の喫茶法）は武士の間にも広まり、有力な寺院が茶生産の中心的役割を担ったことで日本全国に境内茶園が広まった⁴⁾。その中、南北朝時代（14世紀）の『新撰遊覚往来』『異制庭訓往来』に武蔵河越の銘茶『武蔵河越茶』が登場する⁵⁾。室町時代永正4（1507）年の『旅宿問答』に、武蔵国の銘茶は鎌倉時代から室町時代にかけて関東で有力な天台宗の寺院である慈光寺（現在の埼玉県ときがわ町）で栽培された「慈光茶」が記載されている⁵⁾。

江戸時代の承応3（1654）年には、明から新たな喫茶方法である淹茶法が伝えられ、宇治製法が開発された⁵⁾。その後、この製法は武蔵河越茶と慈光茶の生産に導入された。文政2（1819）年に江戸の茶商たちとの取引が始まり、埼玉県の茶生産地は、県の南西部地域へと定着していくこととなった⁴⁾。明治8（1875）年、狭山製茶会社が黒須村（現在の入間市豊岡町）に設立され、これまで、狭山丘陵の麓では「狭山茶」、加治丘陵の麓では「根通り茶」、また集積地の地名から「八王子茶」など、複数の名称を「狭山茶」というブランド名に統一された⁵⁾。狭山茶は国内競争の中で少しでも高い収益を得られるように、「自園・自製・自販」という一貫した生産・販売形態が主流となり⁴⁾、平坦地にある大規模な茶畑と集落の宅地周辺にある小規模な茶畑が混在する栽培形態になっている。

しかし現在、高齢化による労働力の不足が原因で、全国の茶産地において年々茶栽培面積が減少しており、日本の茶産業の衰退が露呈している。埼玉県においては、2020年までの10年間で茶畑の面積は143 haと、東京ドーム約30個分が減少した⁶⁾。その一方、2000年の「県民投票で選ばれた21世紀に残したい埼玉ふるさと自慢100選」⁷⁾では、ジャンルA（名所・自然・史跡・観光・施設・文化財・文化施設）40選の中、「入間の茶畑」が1位となり、ジャンルC（物産・食文化）10選の中、「狭山茶」が2位となり、埼玉県民にとっては狭山茶もその景観も関心が高いことが伺える。また、「農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究（報告）」（2003）において、「入間の茶畑」

* 東京農業大学地域環境科学部造園科学科

** 東京農業大学地域環境科学部造園科学科（令和3年卒業）

† Corresponding author（E-mail: hc207185@nodai.ac.jp）

は畑地景観の重要地域として選出された⁸⁾。さらに2017年には狭山茶農業遺産推進協議会が発足し、狭山茶の農業システムの日本農業遺産の認定に向けて活動している⁹⁾。

(2) 入間市金子台の狭山茶

2006(平成18)年の統計データより、入間市、所沢市、狭山市の3市の中では、入間市が群を抜いて茶栽培面積が大きい⁴⁾。入間市の中で、加治丘陵の南の霞川沿いに集落が形成された金子地区は、中世には武蔵武士の金子氏一族の拠点となり、狭山茶復興の地として歴史が深い^{10,11)}。現在、狭山丘陵と加治丘陵に囲まれた金子台は関東以北の最大の集団茶園となっており、約350haの茶畑が広がり、防霜ファンが林立する景観が見られる。

現在の金子地区は、1889(明治22)年に根岸村、中神村、花ノ木村、下谷ヶ貫村、上谷ヶ貫村、西三ツ木村、寺竹村、南峯村、木蓮寺村が合併した金子村からなり^{10,11)}、明治時代の村名は地名として残っている(図1)。

1908(明治41)年測図の地形図において金子地区の茶畑は散見されるが、桑畑が多く、大規模な茶畑が見当たらない。戦後、狭山茶の茶産業が拡大し、1980(昭和55)年修正の地形図では、大規模な茶畑が確認できる¹³⁾。

金子台南東にゴルフ場や武蔵工業団地が造成され、住宅地の増加、道路の整備と樹林地の減少など、都市化は進んでいるが、金子地区の地形には大きな変化がなく、1908(明治41)年測図の地形図に描かれている各集落の南北方向の旧道は、現在も残っている。旧道の断面をみると、北の加治丘陵の山麓部に神社や寺院が存在し、坂を下ると集落が広がり、その南の低地に霞川が流れる。川を渡ると地形が高くなり、金子台へ登ると茶畑が一面広がる。

その一方、入間市は2003年に「元気な入間ふれあい茶ん歩道(さんぽみち)」として、金子台周辺の里山、川、湧水、丘陵、博物館、地域の歴史をテーマにした7散策コースを整備している¹⁴⁾。そのうち、狭山茶の茶畑をテーマにした「茶畑と丘陵を歩く」コースは、JR八高線の金子駅

を起点にし、反時計回りで金子台の茶畑を東へ横断して加治丘陵を登り、金子駅に戻るコースである。しかしこのコースは全長約10km、徒歩約3時間であり、利用者が限られていると考えられる。また、金子台の茶畑を横断する区間が長く、地形と景観の変化が少ないことや、日陰が少ないため夏場の利用が難しいといった課題がある。金子地区の地形構造を生かした集落の旧道をベースに新しい散策コースを提案し、狭山茶の景観上の魅力を発信することで、狭山茶産業の衰退の減速や地域の活性化の一助になると考えられる。

(3) 本研究の目的

狭山茶について、産業の視点からその製茶機械や生産組織に関する研究¹³⁾は存在するが、狭山茶の産地の景観特徴に言及した研究は、荒井ら(2010)の1報¹⁶⁾のみである。全国の近代以前に形成された茶産地の景観構造を類型化した荒井らの研究では、山地の斜面に栽培される静岡県の大井川流域や、谷底に栽培される京都府白川地区の宇治茶と異なり、金子地区の狭山茶は河川に近い台地の上に栽培されるのが特徴であると解明された¹⁶⁾。なお、他の茶産地の景観について、鈴木ら(2009)と木村ら(2012)が静岡県の大井川流域や滋賀県東近江市の中山間地域において、地域の振興を図ることを目的とし、車窓からみた沿道の茶園景観を分析した^{17,18)}。奥ら(2009)は大井川流域の茶園で、写真投影法を用いて日中の来訪者の景観認識を比較した¹⁹⁾。楊ら(2015)(2018)は京都府白川地区の土地利用の変遷や、伝統的栽培方法を支える材料の変遷を分析し、宇治茶の文化的景観の変容を解明した^{20,21)}。

他の茶産地の景観に着目した研究が進んでいる中、狭山茶独自の景観の魅力を見つけ、発信していくことが急務となる。そこで本研究は、埼玉県入間市金子地区において、既存の金子台の茶畑を東西方向に横断する「茶畑と丘陵を歩く」コースとは別に、狭山茶主産地の地形構造を反映した南北方向の集落の旧道を対象に、道沿いのお茶の景観を分析することで、狭山茶の景観上の魅力をより発信できる散策ルートの提案を目的とした。

なお、茶産地の景観について、「茶畑景観」や「茶園景観」^{20,21)}の呼称があるが、埼玉県入間市金子台では茶畑のみならず、風害や土の流出を防ぐ目的で畑の周りに植えられる畦畔茶や、民家の茶樹の生垣が存在するため、本研究では以上3種類を主体とする景観をまとめて「お茶の景観」と呼ぶこととした。

2. 研究方法

(1) 対象ルートの選出

現在の金子地区は、南北を横断するJR八高線の周辺および西側(木蓮寺、南峯、寺竹)では、都市開発が進んでおり、住宅地の範囲が広く、加治丘陵の山麓部から金子台までの距離が長い。それに対して、JR八高線の東側は、住宅地の拡大が少なく、旧来の集落構造が比較的良く保存されている。そこで本研究は対象地をJR八高線の東側とした。

次に、金子台の茶畑を東西方向に横断する「茶畑と丘陵



図1 旧村名が残っている金子地区の地名
(入間市公開型地理情報システム「いるまっぷ」¹²⁾より加筆)

を歩く」コースとは別に、南北方向の集落の旧道を調査ルートとした。金子台の茶畑が本研究のお茶の景観の重要な構成要素となることが予想されるため、ルートの北の丘陵部に位置する神社や寺院を起点とし、南の金子台を終点と設定した。これは、調査の進行方向を逆方向に設定した場合、金子台の茶畑の眺望が確認できなくなり、お茶の景観が見える区間が短くなるからである。

1908 (明治 41) 年測図の地形図に基づき、加治丘陵の南麓に位置する神社や寺院を起点とし、集落を通過し、明治時代には存在していた橋を経由し霞川を渡り、金子台の茶畑に入る旧道を 5 本選出した。5 ルートは西から東へそれぞれ西三ツ木、上谷ヶ貫、下谷ヶ貫、花ノ木、中神を経由した。以下各ルートは「寺社名一橋名」で命名した。

(2) 現地調査

道路沿いの茶産地の景観の分析方法について、鈴木ら (2009) と木村ら (2012) は車窓からみる景観を再現するために、車内からビデオカメラで録画した後、静止画を抽出して景観要素の画面占有率を求めた^{17,18)}。奥ら (2009) は茶園に調査ルートを設定し、被験者が自由に撮影した写真の景観要素の種類を分析した。なお、他の道路景観の研究では、船や自転車を用いて、カメラやビデオの画像を取得し、景観要素の画面占有率の算出²²⁾ やフラクタル解析²³⁾ を行う研究がみられる。しかし金子地区の旧道は狭く、車両の通行が少ない。また、お茶の景観は金子台のみならず、集落の宅地周辺にも点在しているため、歩行者の視点からの緻密な調査が必要となった。そこで本研究は以下の調査方法を設定した。

まず、5 ルートについて加治丘陵山麓部の神社の本殿あるいは寺院の本堂を起点とし、金子台の茶畑に入り、進行方向の地形とお茶の景観に大きく変化がなくなる地点を終点とした。次に、大規模な茶摘みが行われない晴れの日を選び、徒歩で進行方向の景観を確認しながら、各ルートのお茶の景観が見える区間を地形図に記録した。

それと同時に、進行方向のお茶の景観の変化を把握するために、以下の地点を「変化ポイント」として記録した。

①お茶の景観が出現もしくは消失した地点

②連続するお茶の景観の中で、新しいお茶の景観の種類 (遠景としての金子台の茶畑の眺望、近景としての道沿いの茶畑、畑の周りに植えられた畦畔茶、民家の茶樹の生垣、の中のいずれか) が出現もしくは消失した地点

③連続するお茶の景観の中で、視界の水平方向では、お茶の景観が見える角度が 2 倍以上に増加したもしくは半分以上に減少した地点 (例えば、道の両側に続くお茶の景観の片側が消失した地点、遮断物やルートの屈折によりお茶の景観が 2 倍以上広がった地点)

また、良好なお茶の景観の種類を把握するために、「変化ポイント」のうち、お茶の景観が視界の水平方向の 180° 以上の範囲を占め、かつ周辺の自然環境や集落環境 (山、地形、河川、樹林地、住宅、畑、神社) と相まった広大な景観が出現した地点を「ビューポイント」として記録した。

なお、前述の入間市 2003 年指定の「茶畑と丘陵を歩く」コースを比較対象として、5 ルートと同じ方法で現地調査を実施した。

(3) データの整理と分析

QGIS (ver. 3.4.2) を用いて、国土地理院の基盤地図 (1/2,500, 2020 年 7 月更新) をベースマップに、現地調査の結果を記入し、平面上の各ルートの全長およびお茶の景観が見えた区間の長さを算出した。なお、農林水産省が公表している農地の区画情報²⁴⁾ から畑のポリゴンデータを取得し、国土地理院の基盤地図および現地調査の結果に基づき、調査時の茶畑のポリゴンを抽出した。また、補足的に Google Maps の空中写真を参考した。さらに、断面構造が類似する 5 ルートの地形的特徴を把握するために、国土地理院の基盤地図の等高線に基づき、AutoCAD 2021 を用いて断面図を作成し、標高差を算出した。

3. 研究結果

予備調査は 2020 年 2 月 22 日と 7 月 4 日、本調査は同年の 8 月 21 日、8 月 24 日、8 月 26 日と 8 月 30 日、調査結果の確認と補完は同年の 11 月 1 日、11 月 8 日、計 8 回現地調査を実施した。

5 ルートの水平方向の全長は 751~1,090 m、ルート全体の標高差は 14~57 m とばらつきがあった (表 1, 図 2)。金子台終点の標高をみると、金子台は西から東へ下がる地形となった。お茶の景観が見える区間の長さは、すべて全長の半分以上を超えたが、50.0%~77.8% とばらつきがあった。なお、5 ルートの「変化ポイント」は 6~12 地点であり、ばらつきが認められた。その一方、「茶畑と丘陵を歩く」コースは、全長 9 km を超えるが、お茶が見える区間は 32.4% で低く、ビューポイントは 6 地点であった。

表 1 各ルートのお茶の景観に関する調査結果

番号	ルート名	全長	お茶の景観が見える 区間の長さ (全長に占める割合)	変化ポイント数 (その中のビュー ポイント数)	最大 標高	最小 標高	標高差	金子台終 点の標高
(a)	金子神社一西三ツ木橋	1,054 m	527 m (50.0%)	10 (3)	178 m	138 m	40 m	152 m
(b)	八幡神社一矢口橋	822 m	455 m (55.4%)	8 (1)	167 m	131 m	36 m	149 m
(c)	愛宕神社一欄干橋	1,090 m	703 m (64.5%)	11 (2)	187 m	130 m	57 m	146 m
(d)	山祇神社一犬橋	784 m	610 m (77.8%)	12 (3)	143 m	128 m	15 m	143 m
(e)	豊泉寺一三輪橋	751 m	397 m (52.9%)	6 (1)	135 m	124 m	11 m	134 m
(f)	「茶畑と丘陵を歩く」コース	9,177 m	2,970 m (32.4%)	42 (6)				

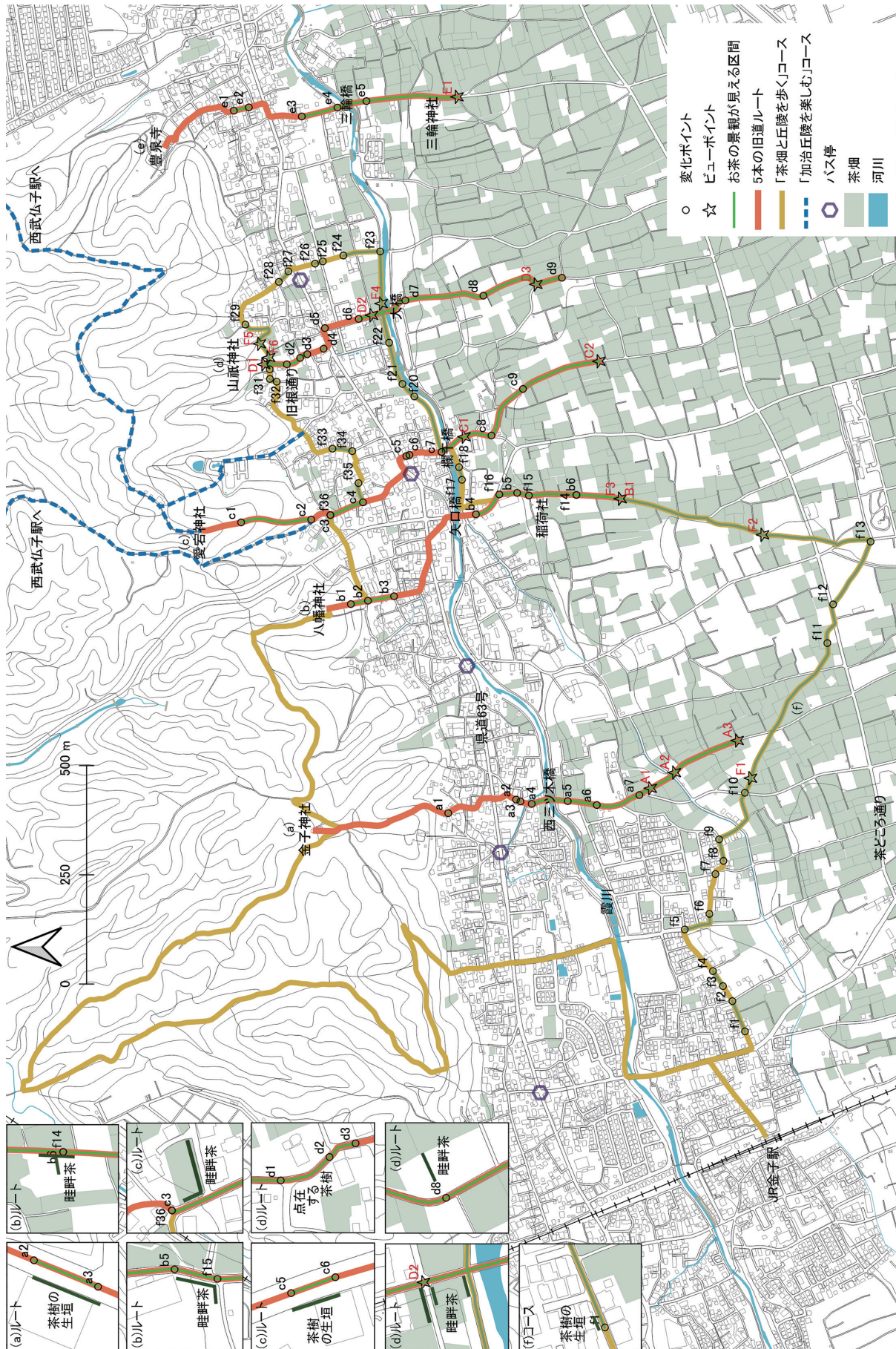


図 2 5 ルート及び「茶畑と丘陵を歩く」コースの現地調査の結果

(a) 金子神社—西三ツ木橋ルート

本ルートは西三ツ木を経由し、全長1,054m、標高差40mとなり(図3)、5ルートの中で地形の変化が多く、長いルートであった。しかしお茶の景観が見える区間は50.0%と5ルートの中でもっとも低かった。

起点の金子神社の標高は178mと高いものの、加治丘陵内のヒノキ林に囲まれ、金子台の茶畑の眺望がなかった。一方、西側の住宅の隙間から金子台の茶畑を眺望できる地点(a1)および西側の民家の茶樹の生垣が見られる区間(a2～a3)が確認された。西三ツ木橋の手前に地形が高くなるa4から、金子台の茶畑景観が出現した。霞川を渡って「馬頭坂」の道標があり、a5から視界の東側はすべて茶畑が占めていた。その後、両側にコンクリート塀の上に茶畑が続き、a6では両側の茶畑景観が消失し、進行方向に茶畑が出現した。a7では道が二股に分かれ、遠方の緩やかな斜面にある茶畑を背景として出現し、享保16年造立の庚申塔を納めた赤い堂宇がみられた。A1まで進むと、道の両側に続いたコンクリート塀の遮断がなくなり、進行方向に金子台の地形の起伏に沿った茶畑が広がり、両側に近景の茶畑が視界を占めた(写真1)。さらに水路を渡ったA2から、広大な茶畑と林立する防霜ファンが視界の180°以上を占め、金子台の緩やかな起伏となる地形を見上げる景観となった。ルートの終点A3まで登ると、金子台一面に広がる茶畑、南側の狭山丘陵、北側の加治丘陵と山麓部の住宅地、西側の遠方の奥多摩の山並みの広大な景観を望むことができた。

(b) 八幡神社—矢口橋ルート

本ルートは上谷ヶ貫を経由し、822mの全長も36mの標高差(図4)も55.4%のお茶の景観が見える区間の割合も、5ルートの中位にあった。

起点の八幡神社の本殿は標高167mであり、高い位置にあったが、社寺林が繁茂し、お茶の景観は認められなかった。本殿と鳥居の中間地点b1まで進むと、木々の間から金子台の茶畑が見え始めた。集落へ降りていく坂道では、鳥居が立つb2から金子台の茶畑の眺望が広がり、b3では新しい住宅の遮断で金子台の茶畑は見えなくなった。その後、お茶の景観のない住宅地が続いたが、車両の通行量の多い矢口橋を渡ってb4から進行方向に、金子台の茶畑と稲荷社の社寺林を囲む金子台の茶畑を見上げるようになった。b5ではルートが屈折し、建物による視界の遮断がなくなり、登り坂東側のコンクリート塀の上の茶畑、西側の畦畔茶、進行方向の稲荷社の社寺林の複合的な景観が広がった。b6まで登ると、コンクリート塀が消失し、金子台の茶畑が広がりつつ、終点のB1では、金子台の茶畑の景観が視界の180°に達し、北側の加治丘陵と、西側の秩父山地の山並みを一望できた。なお、周辺の住宅地が金子台の地形に遮断され、純粋な自然景観が続いた。

(c) 愛宕神社—欄干橋ルート

本ルートは下谷ヶ貫を経由し、全長1,090mで5ルートの中で最長であり、お茶の景観が見える区間は64.5%と高かった。なお、標高差は57mに達し、5ルートの中で地形の変化がもっとも大きかった(図5)。

起点の愛宕神社の標高は187mで5ルートの中の最高点であるが、金子神社や八幡神社の本殿と同様に高い樹木に囲まれ、金子台の茶畑は見えなかった。急勾配の坂を降る途中のc1から、西へ一部伐採された樹木の隙間から金子台の茶畑が出現し、c2まで進行方向に金子台の茶畑を見通すことができた。集落に入ったc3からc4まで、集落内の茶畑や畦畔茶、進行方向に遠方の金子台の茶畑が確認できた。県道63号を渡ると、c5からc6まで西側の民家の茶樹の生垣が確認された。欄干橋の手前から金子台の茶畑が見えはじめ、橋を渡ったC1の東側では、お茶の景観が視界の180°に達し、近景の神明神社の神木と道両側の茶畑、中景の墓地と民家、遠景の金子台の茶畑と三輪神社の社寺林といった複合的な景観が出現した(写真2)。さらにルートが屈折したc8から、勾配の大きい坂が蛇行し、両側に茶畑が交互に出現した。金子台を上がると、c9から道の両側にコンクリート塀が消失して茶畑が広がりはじめ、終点のC2では、霞川周辺の住宅地が金子台に遮断され、一面に広がる茶畑と加治丘陵の山並み、西側の秩父山地の山並みを一望できた。

(d) 山祇神社—大橋ルート

本ルートは花ノ木を経由し、全長784mは5ルートの中で2番目に短かったが、お茶の景観が見える区間は92.5%と群を抜いて最大であった。なお、ルート全体の標高差は15mと小さく、寺社の起点と金子台の終点はほぼ同じ標高となり、地形の変化が少なかった(図6)。

山祇神社本殿の前(D1)から、手前の神社の境内と鳥居、鳥居の前に歴史のある旧根通りが東西方向に伸び、西側に茶畑が見え、遠方に金子台の茶畑を広い視界で一展望できた。進行方向の金子台の茶畑を眺めながら(写真3)坂道を下ると、d1～d2では西側の斜面に点在する茶樹が出現し、d2～d3では東側の集落内の茶畑を俯瞰できた。その後のd4とd5では、進行方向の住宅の隙間から金子台の茶畑が見えた。d6から住宅隣の茶畑が見え始め、大橋の手前のD2まで進むと、視界の180°を超えるお茶の景観が出現し、近景の茶畑と畦畔茶、遠景の金子台の茶畑と三輪神社の社寺林を一望できるようになった。大橋を渡ってから、道の分岐が多く、ルートが屈折したd7からは地形のゆるやかな起伏の上の茶畑や三輪神社の社寺林を眺めながら金子台に登りはじめた。金子台の上のd8からD3まで、手前のサトイモやネギの畑と奥の茶畑の景観が混在した。さらに三つ又に道が分かれているD3まで進むと、四方は茶畑に囲まれていた。秩父山地の山並み、加治丘陵と三輪神社の社寺林を背景にした茶畑のパノラマビューが見えた。なお終点d9から、地形の起伏が少なく、農作物と茶畑が交互に出現する景観となった。

(e) 豊泉寺—三輪橋ルート

本ルートは中神を経由し、全長751mとなり5ルートの中で最短であり、標高差11mで地形の変化がもっとも少なかった(図7)。

起点の豊泉寺本堂は、標高138mと5ルートの起点の中でもっとも低く、住宅の遮断により金子台の茶畑の眺望がなく、住宅地に入ってもお茶の景観がなかった。e1から

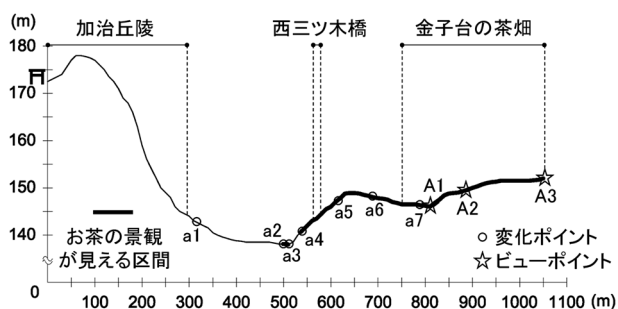


図 3 (a) 金子神社—西三ツ木橋ルートの地形変化

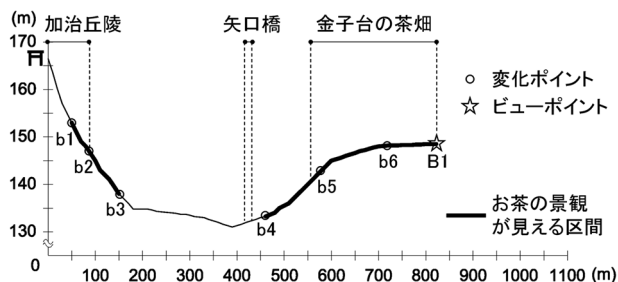


図 4 (b) 八幡神社—矢口橋ルートの地形変化

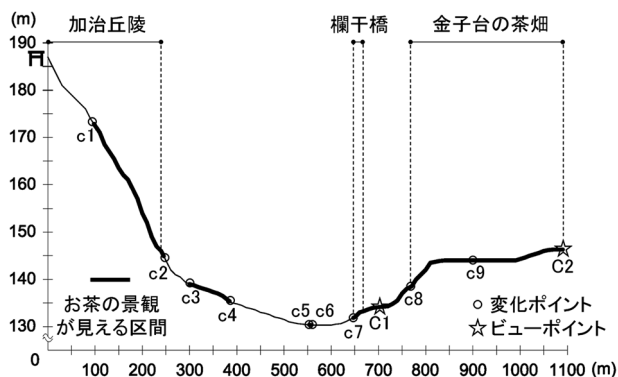


図 5 (c) 愛宕神社—欄干橋ルートの地形変化

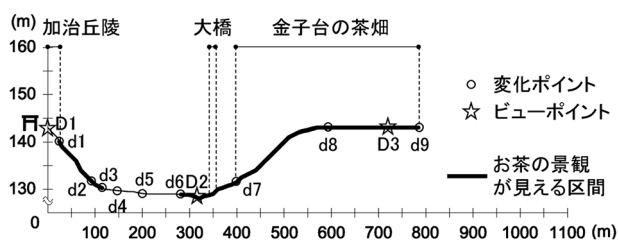


図 6 (d) 山祇神社—大橋ルートの地形変化

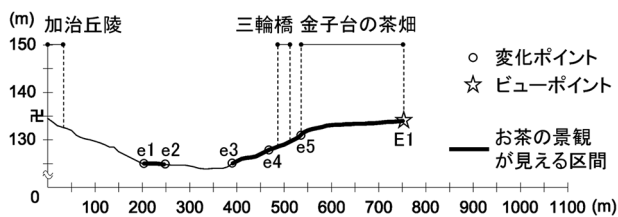


図 7 (e) 豊泉寺—三輪橋ルートの地形変化



写真 1 (a) 金子神社—西三ツ木橋ルート A1: 進行方向に金子台の地形の起伏に沿って広がった茶畑と道沿いの近景の茶畑 (2020 年 8 月 24 日著者撮影)



写真 2 (c) 愛宕神社—欄干橋ルート C1: 神明神社から東へ見た近景の茶畑, 中景の民家と墓地, 遠景の金子台の斜面の茶畑と三輪神社の社寺林 (2020 年 8 月 26 日著者撮影)



写真 3 (d) 山祇神社—大橋ルート D1 の山祇神社を出てから南への金子台の茶畑の眺望 (2020 年 8 月 21 日著者撮影)



写真 4 (f) 「茶畑と丘陵を歩く」コース F6: 竹林からみた手前の茶畑と集落, および遠方の金子台の茶畑 (2020 年 11 月 1 日著者撮影)

e2の区間では、視界に占める面積が極めて少ないが、進行方向の住宅の隙間から金子台の茶畑を確認できた。県道63号を渡り、霞川まで約100mのe3から、進行方向に金子台の茶畑が眺めることができた。三輪橋の手前のe4まで進むと、東側に茶畑の景観が見える範囲が広がり、西側に三輪神社の約50m四方の大規模な社寺林が見え始めた。さらに、緩やかな坂道を登りはじめたe5では、建物の遮断がなくなり、西側に畑、墓地と三輪神社の社寺林、東側に茶畑が混在する景観となった。E1では、東に緩やかな曲線を描く一面の茶畑、南に三輪神社の社寺林と加治丘陵、西に地形が高くなっていく茶畑と遠方の秩父山地の山並みが確認された。

(f) 「茶畑と丘陵を歩く」コース

金子駅から出発して住宅地に入り、住宅の間の茶畑や茶樹の生垣(f1~f2)、両側や進行方向の金子台の茶畑の眺望(f3~f4, f5~f6, f8~f9)、住宅の隙間から見た金子台の茶畑(f7)を見ることが確認された。住宅地を抜けてルートが屈折したf9から細い道に入り、茶畑景観は南へ続いた。f10から金子台の茶畑の中の農道へ切り替わり、道沿いに茶畑が広がった。F1まで進むと、茶畑に四方を囲まれ、南側から北側に向かって緩やかに下がる地形となり、遠方の加治丘陵の山並みが見えた。f11ではサトイモ畑が出現し、茶畑が見える範囲が小さくなり、f12では道沿いの茶畑の景観が消失した。

茶畑の少ない区間を通過しルートが北へ曲がり(f13)、道の分岐から東側の未舗装の道路を進み、F2から茶畑景観が視界の180°以上に広がり、金子台の茶畑、北側の加治丘陵および西側の樹林地を一望できた。その後、畑と茶畑が混在する景観が続き、F3(B1)から八幡神社一矢口橋ルートの一部を逆走する形となった。稲荷社の社寺林を眺めながら金子台を下りをはじめたf14(b6)では、コンクリート塀の出現によりお茶の景観が少なくなり、f15では加治丘陵を背景に、矢口橋周辺の茶畑や畦畔茶が出現した。f16でお茶の景観が消失後、車両の通行量の少ない住宅地を抜け、霞川に沿って東へ続いた。

霞川沿いでは、f17~f18, f19からは南側の金子台の斜面の茶畑を眺めることができた。f20~f21, f22~f23では北側の道沿いの茶畑や畦畔茶が確認された。大橋付近のF4では、北側に加治丘陵と低地にある大規模な茶畑、南側に金子台斜面の茶畑と霞川の河床、進行方向に三輪神社の社寺林が見え、自然要素が豊かなお茶の景観となった。

f23から北へ曲がり、集落内の茶畑が断続的にみられた(f23~f24, f25~f26, f27~f28)。f28から細い急勾配の道を登ると、f29から山祇神社の東側の茶畑がみえた。茶畑の隣の山道を進むと、F5とF6では、背後に竹林、手前の茶畑と集落、遠方の金子台の茶畑と奥多摩の山並みを見渡すことができた(写真4)。その後は旧根通りに入り、f30までおよびf31~f32, f33~f34では金子台の茶畑を眺望でき、f35~36では道沿いの茶畑を確認できた。f36からルートが西へ曲がった後、八幡神社から加治丘陵に入り、茶畑の眺望地点はなかった。また、加治丘陵から降りて金子駅に向かい住宅地の中でも、お茶の景観はなかった。

4. 考 察

(1) 旧道から選出した5ルートおよび「茶畑と丘陵を歩く」コースの特徴に基づいた散策ルートの提案

本研究の調査対象となった5ルートは、加治丘陵山麓部の寺社から金子台の茶畑まで、お茶の景観と地形変化においてそれぞれの特徴が認められた。

(a) 金子神社一西三ツ木橋ルートは、お茶の景観が見える区間の割合が低く、起点からお茶の景観が出現するまでの距離は他のルートより長かった。他のルートに比べ、金子台の茶畑を眺望できる地点が少なく、金子台では社寺林が見えなかった。また、金子神社から下りる坂は急勾配であり、高齢者が利用しにくいと予想される。その一方、前半は加治丘陵の樹林に囲まれる地形の起伏となり、後半は変化ポイントが密集し、さらに金子台に登るとビューポイントは3点確認された。前半の加治丘陵の景観と後半の優れたお茶の景観が対照的となり、景観の変化を楽しめるルートであると考えられる。また、本ルートは金子駅にもっとも近く、金子神社で加治丘陵内の複数の遊歩道に接続するため、アクセスしやすいルートである。

(b) 八幡神社一矢口橋ルートは、全長もお茶の景観が見える区間の割合も、5ルートの中位であったが、ビューポイントは1点のみとなった。また、民家の間に茶畑や畦畔茶がないことや、矢口橋付近の車両の通行量が多いため歩行者が通行しにくいと予想され、狭山茶の景観上の魅力を楽しむにくいルートと考えられる。

(c) 愛宕神社一欄干橋ルートは全長もお茶の景観が見える区間も長く、地形の変化が大きく、金子台の眺望や、集落内の茶畑や畦畔茶、神社や社寺林との複合的な景観が確認され、狭山茶の景観上の魅力を発信しやすいルートと考えられる。愛宕神社からの急勾配な坂は高齢者の利用が難しいが、北へ続く加治丘陵の遊歩道が整備され、桜山展望台や加治丘陵の北麓のあけぼのの子どもの森公園や、入間市が指定している「加治丘陵を楽しむ」コースに接続することで、西武池袋線の仏子駅へアクセスでき²⁵⁾、登山者が利用しやすいルートである。

(d) 山祇神社一大橋ルートは、全長が短く、地形の変化が少ないが、お茶の景観が見える区間の割合も変化ポイント数も5ルートの中で最大であった。また、ビューポイントの3地点は、水平距離上均等に分布していた。山祇神社の標高が低いにもかかわらず、5ルートの起点の中で唯一金子台の茶畑を眺望できる寺社であり、近景の鳥居と旧根通りと相まった良好なお茶の景観が確認された。その他、集落内の茶畑や畦畔茶、サトイモやネギの畑が点在する金子台の茶畑と背景の社寺林など、お茶と多様な要素の組み合わせの景観がみられた。さらに、5ルートの中で標高差が小さく緩やかな道が多いため、高齢者も利用しやすい、狭山茶の景観上の魅力を発信するには優れたルートといえる。

(e) 豊泉寺一三輪橋ルートは、金子台の茶畑に囲まれた三輪神社の社寺林が特徴的であり、また唯一のビューポイントでは金子台の茶畑の純粋な自然景観がみられた。しか

し全長は5ルートの中で最短であり、お茶の景観が見える区間の割合も変化ポイントも少なかった。特にルートの前半は新しい住宅が多く、お茶の景観が認められなかった。また、金子駅から離れることや、加治丘陵内の遊歩道と接続していないことから、アクセスがしにくいルートと考えられる。

その一方、既存の「茶畑と丘陵を歩く」コースは前半と後半で見える景観の特徴が明確に分かれており、加治丘陵内と金子駅周辺を経由する後半部分は、お茶の景観が全く確認されなかった。前半の金子台の部分において、変化ポイントが少なく、未舗装の区間もあった。しかし、金子台の斜面の茶畑と平行に進む霞川沿いで見られた景観や、里山の竹林を背景にした金子台の茶畑の眺望は、旧道から選出した5ルートでみられないため、「茶畑と丘陵を歩く」コースでしか体験できない狭山茶の景観上の魅力といえる。

以上の各ルートの特徴に基づき、旧道から選出した5ルートを単独にみると、(a) 金子神社—西三ツ木橋ルート、(c) 愛宕神社—欄干橋ルートおよび(d) 山祇神社—大橋ルートは、狭山茶の景観上の魅力発信に適していると考えられる。そのうち、(a) 金子神社—西三ツ木橋ルートは金子駅から加治丘陵の西部分を巡る登山者向け、(c) 愛宕神社—欄干橋ルートは仏子駅から加治丘陵の東部分を巡る登山者向け、(d) 山祇神社—大橋ルートは高齢者向けのルートとして提案できる。

なお、徒歩約3時間の「茶畑と丘陵を歩く」コースをより利用しやすく、お茶の景観をより楽しむために、(e) 豊泉寺—三輪橋ルートを除いた4ルートを用いて「茶畑と丘陵を歩く」コースの短縮ルートを複数提案できる。例えば、「茶畑と丘陵を歩く」コースの西部分を利用する場合、(a) 金子神社—西三ツ木橋ルート終点から南へ「茶畑と丘陵を歩く」コースに接続すれば、狭山茶の景観と加治丘陵の体験を確保した上で約1.5時間に短縮できる。「茶畑と丘陵を歩く」コースの南と東部分を歩き、山祇神社もしくは愛宕神社から県道63号へ降り、帰路は2020年現在、定期的に運行されている金子駅と仏子駅その他を結んでいる路線バスを利用すれば、金子台、霞川沿い、集落内、加治丘陵山麓部の狭山茶の景観に特化した約2時間のルートが考えられる。また、駅からバスで(c) 愛宕神社—欄干橋ルートへ移動し、「茶畑と丘陵を歩く」コースの東部分もしくは(d) 山祇神社—大橋ルートを利用すれば、集落内に点在する茶畑や茶樹、および金子台の茶畑への眺望を1時間以内に実感できる。

(2) 狭山茶の景観に関する研究上の今後の課題

本研究は現地で確認されたお茶の景観や地形の変化に基づき、狭山茶の散策ルートの提案を行ったが、今後は研究方法を変えることで、さらなる知見を得ることが可能であろう。例えば、お茶の景観を撮影した写真の角度や景観要素の画面占有率を算出すれば、より定量的に解明できると予想される。また、金子地区の各集落の発展の経緯や茶産業の変遷をヒアリング調査で把握すれば、本研究で選出し

た5ルートの現地調査だけでは得られない景観を見出すことが可能になり、狭山茶の産業振興や金子地区の地域活性化に向けた新しい提案に繋がると考えられる。

参考文献および補注

- 1) 高橋 淳 (2015) 北限のお茶の伝統を引き継いだ狭山茶の香り. におい・かおり環境学会誌 46 (2) : 127-132.
- 2) 入間市博物館ホームページ, 狭山茶産地の風土と特徴, <<https://www.alit.city.iruma.saitama.jp/070/040/010/20200101160000.html>> (最終アクセス 2021 年 5 月 18 日)
- 3) 遠藤 毅 (1979) 武蔵野台地および下町低地の第四系に関する堆積学的研究—特に地下地質の層厚変化について—, 地学雑誌 88 (2) : 43-59.
- 4) 入間市博物館 (2014) 改訂版狭山茶の歴史と現在. 入間市博物館 : 3-21. 市町村別の茶栽培面積は平成 18 (2006) 時点で、入間市が 495 ha, 所沢市が 209 ha 狭山市が 130 ha となっている.
- 5) 入間市博物館 (2019) 史料で読み解く狭山茶の歴史. 入間市博物館 : 4-6, 10-19, 42.
- 6) 農林水産省ホームページ, 作物統計 : 面積調査, <<https://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/sakumotu/menseki/index.html>> (最終アクセス 2021 年 5 月 18 日) 全国の茶栽培面積は 2011 年の 42,000 ha から 2020 年の 39,100 ha に減少し、埼玉県の茶栽培面積は 2011 年の 968 ha から 2020 年の 825 ha に減少した.
- 7) 埼玉新聞社 (2000) 埼玉ふるさと自慢 100 選. 埼玉新聞社 : 6-7, 100-101.
- 8) 文化庁文化財部記念物課 (2003) 農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究 (報告) : 78 <<https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/keikan/>> (最終アクセス 2021 年 5 月 18 日)
- 9) 狭山市ホームページ, 狭山茶農業遺産の認定に向けて, <https://www.city.sayama.saitama.jp/kankou/sayamacha/cha_nougyouisan.html> (最終アクセス 2021 年 5 月 18 日)
- 10) 昔日の入間郡, 金子村 (入間郡史の転載), <http://www.ictv.ne.jp/~tajima/1_02kaneko.html> (最終アクセス 2021 年 5 月 18 日)
- 11) 入間市ホームページ, 入間市公共施設マネジメント白書 (平成 26 年度 10 月), <http://www.city.iruma.saitama.jp/_res/projects/default_project/_page_001/009/086/hakusyo1.pdf> (最終アクセス 2021 年 5 月 18 日)
- 12) 入間市都市整備部都市計画課, いるまっぶ (入間市公開型地理情報システム), <<https://www2.wagmap.jp/iruma/Portal>> (最終アクセス 2021 年 5 月 18 日)
- 13) 谷 謙二, 時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the web」, <<https://ktgis.net/kjmapw/>> (最終アクセス 2021 年 5 月 18 日)
- 14) 入間市ホームページ, 元気な入間ふれあい茶ん歩道, <<http://www.city.iruma.saitama.jp/event/kankou/genkinairuma.html>> (最終アクセス 2021 年 5 月 18 日)
- 15) 新井祥穂 (2016) 狭山茶産地における現局面の技術構成と生産組織の展開. 人文地理 68 (2) : 211-227.
- 16) 荒井 歩, 植田 寛 (2010) 近代以前に形成された茶産地の景観構造. 東京農業大学集報 54 (4) : 307-314.
- 17) 鈴木利和, 奥 敬一 (2009) 大井川流域における茶園景観の特徴と評価構造. ランドスケープ研究 72 (5) : 489-492.
- 18) 木村真也, 村上修一 (2012) 中山間地における沿道の茶園景観の特徴に関する研究. ランドスケープ研究 75 (5) : 661-666.
- 19) 奥 敬一, 深町加津枝, 三好岩生, 堀内美緒 (2009) 大井川中流域の茶園卓越景観における日中の来訪者による景観認識比較. ランドスケープ研究 72 (5) : 657-660.

-
- 20) 楊 真, 下村彰男 (2015) 京都府宇治市における明治中期以降茶畑の変遷について 寺院茶の歴史を有する茶産地の文化的景観に関する研究. 環境情報科学論文集 29 : 49-54.
- 21) 楊 真, 下村彰男 (2018) 宇治白川地区における覆下茶栽培地の文化的景観と栽培システムの変遷に関する研究. ランドスケープ研究オンライン論文集 11 : 86-94.
- 22) 坂本幹生, 松尾 薫, 武田重昭, 加我宏之 (2020) 大阪市都心部の河川における船上からのシークエンス景観のスコア化による分析. ランドスケープ研究 83 (5) : 615-620.
- 23) 國井洋一 (2017) 2020 年東京オリンピックマラソンコースの動画像による景観分析. ランドスケープ研究 80 (5) : 615-620.
- 24) 農林水産省, 農地の区画情報 (筆ポリゴン) の提供, <<https://www.maff.go.jp/j/tokei/polygon/>> (最終アクセス 2021 年 5 月 18 日)
- 25) 入間市都市整備部都市計画課, 入間市ホームページ 加治丘陵マップを配布しています, <http://www.city.iruma.saitama.jp/event/midori_sizen/map_kajikyuryo.html> (最終アクセス 2021 年 5 月 18 日)

A Proposal on the Walking Paths of Sayama Tea based on the Analysis of the Tea Landscapes along the Old Village Streets in Kaneko District, Iruma City, Saitama Prefecture

By

Pingxing ZHANG^{*†} and Michiru YAMAMOTO^{**}

(Received May 20, 2021/Accepted October 22, 2021)

Summary : Sayama Tea, one of the famous tea brands in Japan, is mainly produced in Kaneko District, Iruma City, Saitama Prefecture. We aimed at proposing new walking paths that can demonstrate the value of Sayama tea to the public, decelerate the industry's decline and promote regional development. Field surveys were conducted on five old village streets which started from the shrines or temple located on the southern foot of Kaji Hills and ended on the Kaneko Upland Area, as well as the walking path designated by Iruma City. The distances where the tea landscapes were visible along the streets and the points where the tea landscapes changed were recorded by QGIS. The elevation change was analyzed by AutoCAD. Authors found that Route Kaneko Shrine-Nishimitsukibashi Bridge, Route Atago Shrine-Rankanbashi Bridge, Route Yamadumi Shrine-Oohashi Bridge had longer distances where the tea landscapes were visible, and many changes in the landscape. Considering the landform and access, these three routes are convenient for visitors from JR Kaneko Station, hikers from Seibu Bushi Station and the eastern Kaji Hills, and for the elderly. Moreover, combining the old village streets and the walking path designated by Iruma City, new paths specializing in tea landscapes are proposed.

Key words : Sayama Tea, Tea landscape, Kaneko Upland Area, Old village streets, Walking path

^{*} Department of Landscape Architecture Science, Faculty of Regional Environment Science, Tokyo University of Agriculture

^{**} Department of Landscape Architecture Science, Faculty of Regional Environment Science, Tokyo University of Agriculture (graduated in March, 2021)

[†] Corresponding author (E-mail : hc207185@nodai.ac.jp)